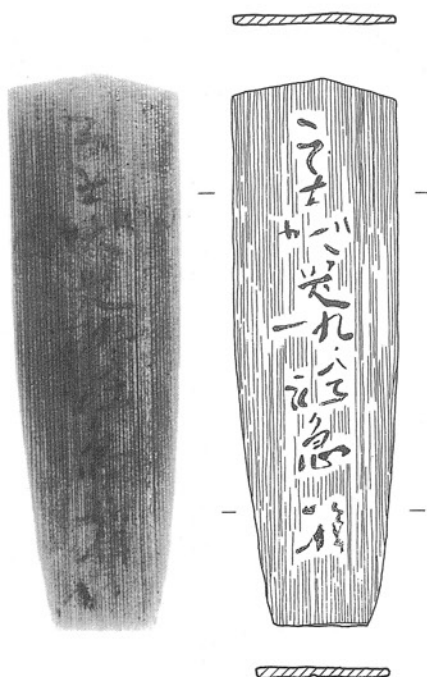




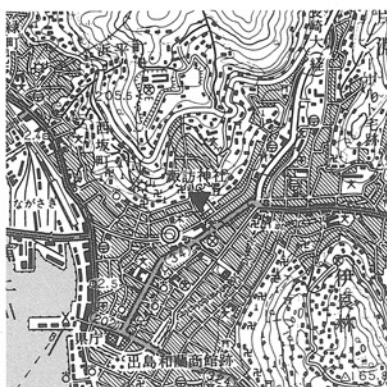
二〇〇三年

9 関係文献

木簡には、上位から「天冠」と上下左右対称に記され、中位には上下対称に「九九八十一」と書かれ、下位には「急々如律令」と思われる墨書がみられる。形状は、長方形の材の一端を山形に尖らし、下端は平らに仕上げ、側縁左右裾をカットして幅狭に成形している。なお、釈読にあたっては、奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏、山本崇氏のご教示を得た。

佐賀市教育委員会『牟田口遺跡』（佐賀市文化財調査報告書一四〇、

（中野 充）



（長 崎）

長崎・炉粕町遺跡（長崎奉行所立山役所跡）
ろ か す ま ち

- 1 所在地 長崎市炉粕町
- 2 調査期間 二〇〇三年（平15）四月～六月
- 3 発掘機関 長崎県教育委員会
- 4 調査担当者 川口洋平・柚木亜貴子・平田賢明
- 5 遺跡の種類 奉行所跡
- 6 遺跡の年代 近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は長崎市街北部にあり、長崎奉行所立山役所跡の南側に接している。主体となる年代は、一六世紀末から一七世紀前半までで、

銅の精錬に関する炉跡や埵塹などが確認されている。さらに、長崎奉行所との境付近で幅約5m深さ約一・五mの東西に延びる溝が検出され、木簡を含む多数の木製品が出土した。溝は、確認された位置や出土遺物の内容からみて、長崎奉行

所に関係する遺構であると考えられる。

長崎奉行所立山役所は、延宝元年（一六七三）に設置されたが、『長崎実録大成』によれば、享保二年（一七一七）に「屋敷内悉ク平地二均シテ本屋長屋全ク造替ラル」と記されるような大改造が行なわれている。実際の発掘調査においても、この記述に対応する整地層が確認されており、前述の溝も出土した陶磁器の年代から判断して、この時に埋められたと推測される。掘削された年代は明らかでないが、排水と境界の機能を兼ねていたものと考えられる。

出土資料の年代は、延宝元年の奉行所設置から享保二年の改造までの可能性が高く、年代の限られた貴重な資料であると評価できる。木簡は一八点出土したが、現在整理中で、釈読できた九点のみを紹介する。

8 木簡の釈文・内容

- (1) ・「長崎東中町 □□ 附札 □□
 ⊕小柳九郎右衛門尉 □□」
 ・「□五 □
 しメこなへ 式□之代
 □□□□」
 226×68×8 011
 「□□□□□□」
 11×25×4 051

- (3) 「小」
 129×19×4 051

- (4) ・「>作□□ 権太郎」
 ・「>かし候五わ□□」
 116×15×3 032

- (5) 「四郎右衛門様参
 (156)×27×2 039

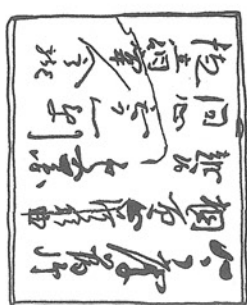
- (6) すみそあり
 ひしおありしらゆう
 ひ□□□□□
 225×100×23 081

- (7) 「□□年人之次
 同心無之刺
 勘□□候処一圓
 町市止□□田
 今坂為止」
 90×115×10 011

- (8) 「あまり
 おぢぎ□
 くて
 こざんす」
 高21×底径40 061

- (9) 「一尺五寸五間入」
 254×10×10 061

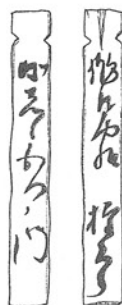
(1)～(5)は、形状および店の屋号などがあることから、奉行所に納入された商品の荷札と思われる。(6)は、容器の一部であろう。(7)は、用途不明の木札、(8)は漆塗りの杯、(9)はものさしである。



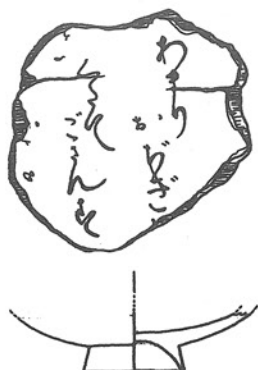
(7)



(2)



(4)



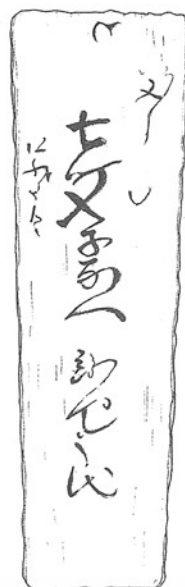
(8)



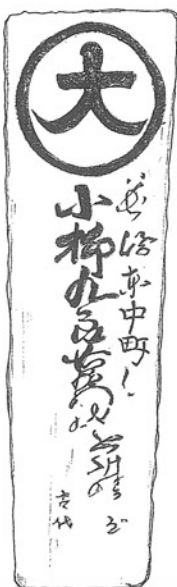
(5)



(3)



(1)



(6)

釈読にあたっては、県立長崎図書館の本馬貞夫氏、石尾和貴氏のほか、東大寺図書館の横内裕人氏、坂東俊彦氏、奈良文化財研究所の吉川聡氏、山本崇氏ほかのご協力を得た。

(川口洋平)